《対談》

奥の細道を訪ねて

―リチャード・R・ニーバー博士に聴く―

聴き手
竹中正夫
（大学神学部教授）

巡礼の旅

竹中　ニーバー先生、このたびは、本年度の新島講座の講師として同志社においでになり、貴重な御講演をいただきありがとうございました。

ニーバー　わたしも、家内のナンシーも今回同志社に招かれたことを光栄に思っています。

竹中　ニーバー先生は、日本にはじめていらっしゃって、京都に来られる前に東北地方を訪ねられたようにうかがいましたが、それはどうしてですか。

ニーバー　わたしはハーバード大学で過去七年間宗教学を担当する委員会の委員長をしていました。世界の諸宗教を大学の一般教養の学生たちに教えるにあたって、世界の宗教の中にある「巡礼」を中心テーマとして学んできました。その中で、わたしは、芭蕉に関心をもつようになったのです。今回は、同じ担当者の一人である、ウィリアム・グラハム氏と一緒に奥の細道をたずねたのでした。グラハム氏はイスラムの専門家であり、かつ日本の山岳宗教に関心をもっている若い研究家です。

竹中　どのような準備をされたのですか。

ニーバー　『奥の細道』を読みながら、地図をひろげて、『奥の細道』の跡を辿ってみました。わたしたちは、『奥の細道』のこの訳本を熟読しました。一つはペンギンから出ている湯浅氏訳のものと、もう一つはハーバード・イエンチン研究所の図書館にあった釜池氏訳のものでありました。同志社で釜池先生に親しくおめにかかることが出来たのも嬉しいことでした。

竹中　日本にこられたのはいつでしたか。

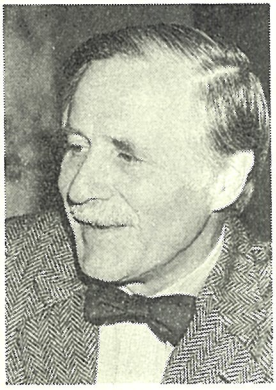
ニーバー　わたしたちは、四月二二日に東京に着きました。二日ほど準備をして東北の旅に出たのです。

竹中　どのような巡路を辿られたのですか。

ニーバー　はじめに電車で日光に参りました。芭蕉は東照宮について直接触れていませんが、日光について可成り書いています。ですから二日ほど日光に滞在し、東照宮やうらみの滝などを眺めました。それから松島に参りそこで一泊しました。美しい風景でした。翌日、再び電車に乗って平泉に赴き中尊寺と藤原秀衡（ひでひら）の館を訪ねました。

竹中　「夏草やつわものどもが夢の跡」とうたったところですね。

ニーバー　そこに芭蕉の残した二句がきざ



リチャード・R・ニーバー博士

まれた二つの石碑がありました。ちょうど桜の花が咲いていました。わたしたちは平泉に二泊しました。

竹中　それは心に残る光景であったことでしょう。

ニーバー　平泉からやや南に下って鳴子に参りました。そこでもわたしたちは、日本旅館に泊りました。宿の主人は、芭蕉に関心をもった人で、わたしたちを自分の車に乗せて鳴子近辺を案内してくれました。山刀伐峠や外川などに参りました。

鳴子から、わたしたちは鶴岡の郊外に参り三泊しました。そこから羽黒、湯殿、月山などの山に登る計画でしたが、生憎まだ雪が多く果たせませんでした。しかし、羽黒山に登ることが出来ました。こまかい春雨がしとしと降っており、山には雲がかかっていました。こんもりとした巨大な檜が聳え印象に深い光景でした。そこから秋田に出て京都に来たわけです。

竹中　全部で何日かかりましたか。

ニーバー　一〇日間でした。ちょうどゴールデンウィークのころでしたのでどこにいっても多勢の観光客が熱心に史跡を訪ねているのをみて感銘しました。

竹中　奥の細道を辿ってどういう印象をもたれましたか。

ニーバー　非常に心うたれたことの一つは芭蕉の叙述の正確さであります。松島や平泉そして北潟などの芭蕉の叙述は、詩的に美しいのみでなく、その雰囲気をよく伝えていると思いました。

竹中　その雰囲気とはどういうものでしょうか。

ニーバー　いままでにあのような風景をみたことがありません、山はさして高い山ではありませんが、かなり峻しい山で、頂は雪に蔽われ、ふもとでは桜が咲いていました。山肌は柔かく、もやがたちこめていました。しかし、何か近よりがたいおごそかさが秘められていました。ふさわしいことばが見当りません。

竹中　日本美術史の専門家である源豊宗先生は、日本美術の特質として「雰囲気の芸術」と「秋草の芸術」ということを指摘しておられます。芭蕉の歩んだ奥の細道にはそうしたものが感じられましたか。

ニーバー　芭蕉の旅路を辿って、わたしは芭蕉が、山、海、海岸線、空、雲などひろがりをもった巨大なものと対比して、特定の小さな草花や枝葉に眼をむけていることに打たれました。宏大な自然を舞台として、小さな世界を凝視している姿に感銘したのです。

エドワーズと芭蕉

竹中　同志社における新島講演でジョナタン・エドワーズをとりあげて、先生は、彼の自然観を分析されましたが、どういう点に注目されたのですか。

ニーバー　エドワーズはきわめて綿密な自然の観察者でした。樹木の年輪、蜘蛛の巣の構図や稲妻の線などを詳細にノートしています。彼はカルヴィニストでした。ですから、特定の部分的なものの中に神の意志のこもっ

ていることを信じていました。ごく日常的なものの特定の姿は、永遠の神の鏡であると考えていました。それらは、彼の手記に記録されています。

竹中　今日わたしたちは巨大な都市に住んで無力感を覚えています。エドワーズや芭蕉が感じた自然理解は人間観とどうかかわるのでしょうか。

ニーバー　エドワーズも芭蕉も、人間の生の短さ、はかなさを知っていたと思います。人間の生は、宇宙や四季のドラマに属するものでした。そこに自然と人間の離反はありません。

ところが、今日の大都会の生活において、人間は名前を失い、自然の力による影響を稀薄にし、むしろ、政治的な力によって規定されています。ですから、一八世紀の時代の人びとが理解した人間と自然の関係とはきわめてちがって来ています。それ故に、今日では環境保護の運動が起こるのは当然のことだと思います。米国では今日、自然がきわめて重要な意味をもつものとして再評価されています。

竹中正夫教授

竹中　日本でもそのことは大事なことになっています。われわれの自然環境を守るのみでなく、生花や盆栽のように、小さなものの中に自然の装いを象徴的に賞味しようとする姿勢が強くなってきています。

三人の思想家たち

竹中　ニーバー先生は、今回の新島講座で三人の思想家、―エドワーズ、コールリッジ、ジェームスーの思想を扱われました。多くの人びとが、先生の綿密な、そして示唆に富んだ分析に感銘していました。とりわけ、先生の分析の方法として、それらの人びとを断片的に扱わず、人間存在の全体としてとらえ、宗教体験と芸術的表現の不可分の関係を追求されました。先生が扱われた三人の思想家たちは、その相異点にも拘らずなにか共通したものがあったように思うのですが。

ニーバー　わたしは、一九五六年から大学で講義をしていますが、わたしは、一八世紀から一九世紀にかけての西洋の宗教思想を主として扱ってきました。その点で三人はその時代に登場してくる人びとであります。さらに、これらの三人は、宗教というものが、理論や制度ではなく、体験というものに根ざしたものであることを語っています。教義は体験から生まれるものですし、教義を理解するためには、その人の宗教体験を分析する必要があることを示唆しています。

竹中　エドワーズの体験はどうでしたか。

ニーバー　エドワーズは神秘的性格をもっていました。かれは一八世紀ニューイングランドのあの大宗教覚醒というリバイバル運動の中心的指導者でした。そこから、彼は宗教的経験について考えるようになりました。

竹中　コールリッジの場合はどうでしょう。

ニーバー　コールリッジもまた人間の日常の体験を重んじました。彼の宗教思想は、彼の経験に基づいています。

竹中　ジェームスは「宗教経験の諸相」と

いう名著をあらわしていますね。

ニーバー　ジェームスのプラグマティズムの中心には、理論は実践を検証したものであるという確信がありました。これらの三人の思想家たちに共通していることは、人間の経験を重視するという点でありました。ですから、彼らを経験主義者（empiricist）と呼ぶことが出来ると思います。理性のつとめは、われわれの体験に光をあてて理解することであると思っていました。宇宙の宏大な生の働きが日常の小さな体験の中に宿っていることに彼らは目をむけた人たちでありました。

竹中　わたしは、最近、『天窮の旅人』という題で宮芳平という一人の画家の伝記を出版したのですが、宮芳平が好んで用いたことばに、「大智は大愛の母なり」ということばがあります。眼を開いてそのものをまず見ること、そして知ることが、そのものを愛することの根源であるという意味であります。

ニーバー　わたしが取り扱った三人の思想家たちはそれぞれちがっていますが、自分と自分をめぐる世界に対するめざめた感受性を深めそして豊かにしようとしていた人たちでした。コールリッジは、しばしば、惰性的な習慣的な感受性と新鮮な、そして、めざめた感受性（awakened awareness）をはっきり区別しています。彼にとっては、詩においても人間の成長においても大切なことは新鮮な感覚（freshness of sensation）でありました。理性の働きは、まさに、新鮮なめざめた感受性をもって得たものを分析し吟味するものでありました。こうしたコールリッジの考え方は、エドワーズやジェームスの根底にある信念と相通ずるものがあったと思うのです。換言するならば、彼らはわたしたちの体や心の中で、わたしたちが経験しつつあることにめざめて応答することを大切にした人たちであります。

竹中　あなたは、チャペルでのお話で、人間は必ずしも天才的な芸術家ではないが、ひとりひとりは或る種の詩人であるということをいわれましたね。この点についてお話しして下さいませんか。

ニーバー　そうですね、コールリッジに例をとって話してみましょう。たしかに天才的な詩人は稀少です。しかし、すぐれた詩人はコールリッジのいう基本的想像力（the primary imagination）の働きに依存しています。わたしたちが、経験するものを感受する力です。感受したものからわれわれは想像力を培うのであります。コールリッジが第二の想像力としてあげているものは、感受したものをときほぐし、整理し、それらを新しい形体として表現する力であります。詩人のつとめは、読者に理解されうる新しい形体を見出すことにあります。

ですから、詩を読むときに、読者は、詩人の辿ったこの二つの想像性の道を歩む必要があります。「詩を理解するためには詩人とならねばならない」ということが出来ると思います。芸術的な作品を観賞する場合でもそうではないでしょうか、その作曲家が何をどういう風に感受し、どういう形体をもって表現しているかを理解することが必要です。それは、一つの芸術家のいとなみであるといえましょう。

竹中　エドワーズのことばでいうとどうなるでしょうか。

ニーバー　エドワーズは、ちがったことばで共通の真理を語っていると思います。彼にとっては、聖徒とは、自然と人間の世界にこもっている神の栄光を理解する人を意味して

いました。そこに神の働きを愛の眼をもってみつめ、それを讃美する姿勢をもつことを強調しました。そうした感受性が信仰者にとってきわめて大切なものとなっています。わたし自身もそのような考え方を自分自身の生活の中心にもつようになってきたのです。

父 H・リチャード・ニーバーのこと

竹中 あなたの数回にわたる講演をききながら、わたしは、あなたのお父さんであるリチャード・ニーバーのことをたびたび連想しました。たとえば、わたしにとって、ちょうど山びこのようにいつもこだましている彼の言葉があります。それは「何かがなされつつある。」(What's going on) ということばです。リチャード・ニーバーはよくそのことばを用いました。「歴史の中に、宇宙の中に、何かがなされつつある。わたしたちは、眼を開いて、その何ものかを把握し、それに応答しなければならない」というのが、彼の基本的な生に対する態度であったと思います。

ニーバー その通りです。それは、まさにエドワーズ的な態度であったと思う。父が、いつごろからエドワーズを読み耽けったかよく知りません。しかし、エドワーズを読んできわめて近親感をもつようになったことは事実です。

竹中 彼の主著の一つである『キリストと文化』においても、エドワーズは、きわめて高い評価をもって叙述されていますね。

ニーバー そうです。それから、父の初期の作品である『アメリカにおける神の国』(一九三七年)において、エドワーズは取り上げられています。わたしは「父ニーバーとジョナタン・エドワーズの対話」というテーマで論文を書く準備をしています。

竹中 それは、あなたが関心をもっている近代のキリスト教思想史の研究において、きわめて重要な貢献となると思います。

ニーバー 先年わたしは、父や伯父ラインホールドの学んだイーデン神学校で、そのテーマについて講演をしたことがあります。

竹中 二番目に、お父さんニーバーについて想い出したことは、わたし自身の経験につながったことでした。わたしは、はじめ京都大学で経済学を学び、実業家になるつもりでいました。わたしは北京で生まれ、満州で育ちました。人口が多くこせこせしている狭い日本で住むより広々とした大陸で仕事をしたいと思っていました。戦争に敗れてはじめて、日本が歩んできた道が間違っていたことを反省させられました。そこから、人間とは何か、わたしたちの人生の目的は何かということを探求するため神学を学ぶようになりました。同志社からイェールに赴いたのが、一九

五〇年のことでした。そのときリチャード・ニーバーの講義をきいて啓発されるところが少くありませんでした。彼が一九五一年に講じた「一九世紀におけるプロテスタント神学」というコースがありました。そこではじめて、わたしは、サムエル・テーラー・コールリッジの名前をきき、バージル・ウィリーの『一九世紀研究』をよんで、宗教と文化の交錯に関心をもつようになりました。今日でいうときわめて学際的なアプローチでした。宗教と文学、信仰と詩、思想と体験の相互関係が問われていました。

ニーバー　わたしも、あのころイェールで学んでおり、父の講義をききました。わたしもコールリッジのことを知らされたのはあの講義によってでありました。

竹中　今回の新島講座で、三人の思想家が扱われましたが、それらの人々の独自な実存的な体験を分析することによって、宗教と文学、信仰と芸術、の相互の関係が検討されたことに特色があったと思います。このことはキリスト教主義の総合大学にとってきわめて大切なアプローチではないかと思っています。

京都と同志社

竹中　先生は、同志社に約四週間滞在され講演の合間に多少は古都をお訪ねになったと思いますが、感想をきかせて下さい。

ニーバー　わたしは、教育は都会でなされるものだと思っています。同志社は、京都という伝統のある美しい都市を背景として存立していることは倖いなことであります。総長をはじめ、同志社の学生、教職員の方がたから受けた親切を忘れることが出来ません。この学園にはコスモポリタン的な性格があるとわたしは痛感しています。同志社の人びとには国際的な要素が豊かにあります。同志社が京都にあることは、この古都にとっても倖いなことであると思います。

それから、もう一つの印象、それは、同志社の人びとを含めて、日本人はきわめて、活動的な、能動的な人びとであるということです。

竹中　でも先生が、日本にいらっしゃった当初は、天皇誕生日、メーデー、憲法記念日、子供の日と一日おきに休日があって、日本人はなんと休み好きなそして怠慢な国民と思われたのではないでしょうか。

ニーバー　決してそうは思いません。日本人は大変活動的な人たちと思います。休暇でも至って能動的に動いているように思いました。とにかく、日本人は精力的によく働く国民だというがわたしの印象です。

竹中　一〇五年前、ニューイングランドから帰ったばかりの新島は、多くの人びとの反対をおし切って、キリスト教主義の学園、同志社をこの京都の地に創設した。はじめはわずか八名の学生でした。いまは、二万人をこえる学園となりましたが、それだけに問題をかかえています。

ニーバー　たしかにそのことを感じます。また同時に新しい時代にむかって同志社には多くの可能性があることも事実です。同志社の発展を祈ってやみません。

竹中　どうもありがとうございました。

（一九八〇年五月二九日無賓主庵にて）